

|             |   |               |             |
|-------------|---|---------------|-------------|
| 氏 名（本籍）     | 相 <sup>あい</sup> 澤 <sup>ざわ</sup> 啓 <sup>けい</sup> 一 <sup>いち</sup> （東京都） |               |             |
| 学 位 の 種 類   | 博 士（文 学）  |               |             |
| 学 位 記 番 号   | 博 乙 第 2340 号  |               |             |
| 学位授与年月日     | 平成 20 年 2 月 29 日  |               |             |
| 学位授与の要件     | 学位規則第 4 条第 2 項該当  |               |             |
| 審 査 研 究 科   | 人文社会科学研究科   |               |             |
| 学 位 論 文 題 目 | 「語り得ぬ衝撃」を語る戦後ドイツ文学の系譜   |               |             |
| 主 査         | 筑波大学教授  | 博士（文学）        | 荒 木 正 純     |
| 副 査         | 筑波大学教授  | 文学博士          | 廣 瀬 幸 生     |
| 副 査         | 筑波大学准教授   |               | 青 柳 悦 子     |
| 副 査         | 筑波大学准教授   | Dr. Phil.（文学） | ヘラト・ヘーゼルハウス |
| 副 査         | 筑波大学講師  | 博士（文学）        | 齋 藤 一       |
| 副 査         | プール学院大学学長   |               | 井 上 修 一     |

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、トーマス・マン、アルフレート・アンデルシュ、クリストフ・ハインらの小説を対象に、戦後ドイツ文学を貫く共通の問題意識とその表現の変遷を「Betroffenheit」というキーワードを軸に読み解き、アウシュヴィッツ体験によって傷つけられた言語を用いて「語り得ぬ衝撃」をなおも語ろうとするこれらの作品が共有する表現方法や作品構造を解明しようとしている。本論文の構成は以下のとおり。

### 序章

#### 第 1 章 Unrecht と Betroffenheit

#### 第 2 章 物語られた記憶としての国民意識

#### 第 3 章 美的な物語からの訣別

#### 第 4 章 自己破壊による文学表現

#### 第 5 章 東独末期における政治と文学

#### 第 6 章 変容する Betroffenheit をめぐる攻防

### 終章

序章では、本論文がキーワードとする「Betroffenheit」をめぐる解説・定義がなされている。この語は、標題では「語り得ぬ衝撃」と日本語で言い換えられているが、今日ではもっぱら「何らかの犯罪や差別の被害を自ら受けたとき、あるいはそれを他者が被ったことを知ったとき、強い衝撃に打ち当てられて抱く筆舌に尽くしがたい愕然とする思い」という意味で用いられるものとなっており、ナチズムの経験を経て既存の語に新たに付与されたこの意味内容を適切に表す日本語の定訳は未だ存在しないとしている。この意味での Betroffenheit は、Unrecht、すなわち「国家や社会が個人にたいしておこなう、人倫に悖る犯罪行為」を意味する語と対をなしているとされる。従来、ドイツ文学研究で Betroffenheit という視点から作品が論じられたことはほとんどないが、この概念はナチズムや東独の過去、ひいては現在の社会問題と真摯に取り組む文学作品を分析するための有効な視点を提供してくれるとしている。

第1章は、戦後ドイツの文学を考察するうえで、Betroffenheit がキーワードとしていかに有効であるかを論じている。アウシュヴィッツを語ることが不可能であることを、生き残った証人たちは口をそろえて訴えている。アドルノの「アウシュヴィッツの後に詩を書くことは野蛮だ」、あるいは「小説の形式は語りを求めているのに、もはや語ることはできない」といった定言は、この不可能性を表現したものであると理解した上で、著者は、戦後ドイツでこの不可能性を引き受け、語りそのものの自己破壊によって Betroffenheit を表現しようとする一連の作品群が書かれたとし、それらを「Betroffenheit の文学」と名づけて、そこに見られる語ることの困難さをめぐる問題を検討している。

第2章は、戦後ドイツの「Betroffenheit の文学」が、それ以前の文学における美とナショナリズムの、また物語と歴史の自明の共生を意識的に否定・克服することから始まったとする立場から、19世紀ドイツにおいて、物語を語ることがいかなる役割を果たしたかを検討している。具体的には、民衆が伝承してきた物語としてのメルヒェンを語るとしたグリム兄弟の姿勢を検討し、「ドイツ民衆の真正な声なるものが存在する」との前提から実際には童話の捏造を続けた彼らの営為の中に、「物語欲求」により歴史や国民意識が創りあげられていった様子を見ることができるとしている。

第3章では、トーマス・マンが、いかに小説の伝統的物語性を意識的に破壊・変質させるにいたったかを検討している。第一次世界大戦の頃、マンは、政治に対する文化の優位を説きドイツ民族固有の文化への回帰を主張したが、その姿勢には、グリム以来の「物語・ネーション・歴史」の三位一体が20世紀初頭に行きついた攻撃的ナショナリズムが見られるという。その後、徹底的な自己省察をおこない民主主義信奉者へと変貌したマンは、ナチズムの台頭により崩壊していくドイツを目の当たりにすると、自らの Betroffenheit を『ファウストゥス博士』(1947年)という小説によって描いた。「芸術の不可能性」を認識していたマンは、語り手に対する徹底したイロニーを作品の構成原理としたという。善良にして哀れな語り手は、主人公が破壊せざるをえなかった理由もわからぬまま悲壮な調子で悲劇を語りつづける。こうしてこの作品は、能力不足の語り手による破綻した語りによって、「芸術の不可能性」を自己言及的に描くものとして成立し、「Betroffenheit の文学」の基本的特徴を備えているとしている。

第4章では、アルフレート・アンデルシュの小説『エフライム』(1967年)を検討し、語り手の破綻したありようがテキストの前景を占めている様子を分析している。語り手エフライムは、少年時代、ナチズムによる大量虐殺をのがれ、27年ぶりに「祖国」ドイツに帰ってきたユダヤ人として設定されている。両親をアウシュヴィッツのガス室で虐殺されたこの主人公の Betroffenheit は語り得ぬほど大きく、彼がその思いを直接語ることはほとんどない。代わりにテキストの前面に描かれているのは、異常な性的憶測やかんぐりで頭を一杯にした主人公の、抑圧され挫折した惨めな姿である。こうした、アウシュヴィッツという語り得ぬテーマと不快な描写の連続との組み合わせは、Betroffenheit を語るためのアンデルシュ固有の手法であり、そこに見られる破綻した語り手の病的な諸症状は、社会的役割を担えず自己満足に陥っている文学に対する自己反省の表現でもあったとしている。

第5章では、旧東ドイツの代表的作家クリストフ・ハインの小説が分析・検討されている。社会からの「暴行」で心や人格が本人も気づかぬうちに変形・破壊されてしまった主人公たちの、「もはや人生とはいえない」ような人生を描くハインの作品は、単に東独の代表的な体制批判文学であっただけではなく、「抑圧」や「記憶」といった、現代社会に生きる個人にとっての問題を普遍的に問いかける小説ともなっているという。『龍の血』や『ホルンの最期』などの80年代の小説は、表面上は、人格破綻した語り手たちが無反省に語るテキストであり、そのため読者は、そこから「下層テキスト」を再構成しなければならない。その作業の結果浮かびあがってくるのは、表層では見られない主人公の叫び、Unrecht への怒りと絶望、さらに、下層テキストによってしか Betroffenheit を表現できない文学の悲鳴でもあるとしている。

第6章は、まず、ドイツ統一を境に、Betroffenheit が公然と揶揄されはじめた状況について検討している。

こうした新たな状況は、「過去の克服」の儀式が反復されるなかで、本来語り得ないはずの Betroffenheit が安易に語られた結果、Betroffenheit に対してドイツ社会に起こった「うんざり感」や反感に起因しているとして、イエニンガー事件やベルリンのホロコースト記念碑建設をめぐる論争、また Betroffenheit に対する反感と嘲笑を公然と主張する政治家ショイブレや作家マルティン・ヴァルザーの演説などを分析している。その上で、こうした状況を逆手にとって書かれたギュンター・グラスの小説『蟹の歩みで』（2002 年）における、Betroffenheit を語るための新たな戦略を綿密に検討している。

終章では、第 6 章までのまとめをしたあと、Betroffenheit というテーマがドイツ社会にとっての試金石となっていること、さらには、安易な物語への誘惑を絶って Betroffenheit の表現を試みる文学が、メディア社会の今日でも、文学固有の表現をなお開拓する可能性を持ち得ることなどを指摘している。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

アドルノは、「アウシュヴィッツの後に詩を書くことは野蛮だ」と言った。戦後ドイツ文学は、このことばに代表されるような重い課題を担いつづけてきたが、そうした問題圏を正面から論ずるために、本論文は、Betroffenheit というキーワードに着目した。この語は、情緒的な要素をつよく持つ語であるだけに、微妙で扱いにくい。そのため、戦後ドイツにおいて頻繁に使用された重要な語でありながら、従来、ドイツ文学研究では、この語を用いてそれが指示していることがらを論じる作業は、我が国はもとよりドイツでもほとんどなされてこなかった。

本論文の独創性は、まず、この概念に着目し、その概念の緻密な分析から出発して、大きな歴史的な文脈から個別の文学作品を解釈したことにある。それにより、さまざまな個別的課題が、総合的にまとめあげられることになった。

こうした作業や議論は、とくくイデオロギー的な立場表明や倫理的論争に陥りがちであるが、本論文は、すぐれたバランス感覚によって、Betroffenheit をめぐる議論を精密に分析しつつ、過去との取り組みを回避しようとする議論を批判し、また同時に、ルーティン化する過去との取り組みの儀式や過度の感傷的反応の問題点を指摘している。

戦後ドイツ社会が抱えてきた上述の課題に対して、文学がどのように対応してきたのかという問題意識を鮮明に持ちつつ、個別の文学作品を綿密に分析したことにより、本論文が取りあげたいいくつかの作品間に、従来気づかれることのなかった文学史的脈絡のあることが明らかとなった。また、本論文は、Betroffenheit の概念を入り口として、文学研究を越えた広い視野から物語理論（語りの理論）を捉え直したことにより、ナショナリズムや歴史研究と文学研究との関連を追究する巨視的な研究の地歩を固めることができた。

さらに、トーマス・マンのような評価のさだまった作家だけでなく、アンデルシュやハインといったとくく過小評価されたり忘れ去られたりしがちな作家の作品にも独自の解釈と再評価がなされ、そこに新たな意味とアクチュアリティを付与することができている。

このように本論文は、文学と社会の関係を広い視野から論ずるという課題と、個別の文学作品を精密に、かつ説得力をもって分析し、これまで読みとられることのなかった意味を救い出すという課題を遂行している。ただし、グリム兄弟の営為に着目した第 2 章におけるナショナリズムや歴史に関する議論は、問題の大きさに比してやや精密さに欠けるきらいがある。

とはいえ、それによって本論文の価値が本質的に貶められるわけではない。現在、19 世紀以来のネーションをめぐる議論や最近の主要メディアに見られる多くの言説は、物語欲求に身をゆだね、さまざまな話題を感動を呼ぶ物語形式にして大量処理・大量発信する傾向にある。こうした事態にあらがう形で、本論文は、自らの Betroffenheit を忠実に語ろうとする困難な課題を引き受けた文学に着目し、改めてそれに意味づけを

した。こうした点で、本論文は、文学が持つ固有の表現可能性への期待とその責任をはっきり浮かびあがらせ、ドイツ文学研究のみならず、文学研究全般にわたって寄与するものと判断される。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。